

メルヴィルの『^{コンフィデンス・マン}詐欺師』について

根 本 治

1

Merton M. Sealts, Jr.⁽¹⁾ と Elizabeth Foster⁽²⁾ によれば、メルヴィルの *The Confidence-Man: His Masquerade* は “The Piazza” 以前に、おそらくは 1855 年の夏に書き始められた。そして、彼が健康のためということで聖地旅行に出発したのが 56 年 10 月であるので、完成はそれ以前、Jey Leyda⁽³⁾ によれば 7 月である。出版は翌 57 年の 3 月末日ないし 4 月 1 日であった⁽⁴⁾。

このような細かいことを書きとめておくのは、この作品を自己完結した言語構築物として、生身の著者がその作品の執筆時におかれていた精神状態や、さらには、彼が生きていた社会や時代と無関係なものとしては論じないためである。メルヴィルの周囲の人々が 53 年から既に彼の「健康」を気遣っていたことや、同じ 53 年から先行きを案じられていた景気の動向が、57 年 8 月のパニックとなって現実化し⁽⁵⁾、この年の選挙戦からリンカーン・ダグラス論争を経て、61 年 4 月には南北戦争という最初の近代的戦争が言わば互いに知り合いの人々の間で起ることになっていたアメリカ史の大状況を見逃さないことが、この作品についての解釈を有意義なものとする一つの有効な方法であると思われるのである。

この作品ほど解釈の定まらないものも珍しい。評価が毀誉半ばして定まらないという意味ではない。出版直後の書評がほとんど口をそろえて、何を言おうとしたのかまったく理解できない作品だ、と言ってけなした時から⁽⁶⁾、Matthiessen が現実の厚みを描写できなかった作品として低い評価しか与えなかった時まで⁽⁷⁾、長い間まともに取上げられなかったものだ。Richard Chase⁽⁸⁾ の高い評価を契機として、解釈に値する重要な作品だとする見方が定着し始め、John Shroeder の論文⁽⁹⁾、そして理解の水準を画期的に引き上げた Foster の解説と注釈、それらを総合した Daniel Hoffman の解釈⁽¹⁰⁾ などが提出されたにもかかわらず、その後も数多くの解釈が提出され、この作品に関する唯一の研究書⁽¹¹⁾ が分類しているような亀裂と混乱が現在まで続いている。このように解釈が分かれる原因は、この作品がどういう意味で完結しているのか、その構造そのものに意見の一致がないからである。もちろん最後の文章が “Something further may follow of this Masquerade.” (p. 217) となっているからというだけの理由ではないが、Matthiessen のように “an extended fragment” と見る者がいたことは無視できないことである⁽¹²⁾。Bruce Franklin が指摘するように⁽¹³⁾、二人の牧師が後に混同され、一方の牧師だけしか知るはずのないことを他方が知っていたりする作者の側の不注意がうかがわれることも、作品の完成度に疑問を持たせるものだ。

この作品はミシシッピーの河船とその乗客たちを扱いながらも、Mark Twain の *Life on the Mississippi* のようにそのリアリスティックな描写に狙いはなく、極めて寓意的な性

格を持つ物語である、とする方向に大勢が動きつつも、いかなる意味を啓示するための寓話なのか一致せず、具体的には、主人公の「詐欺師」が悪魔であるのか、正反対にキリスト的人物なのかにさえも見解が分かれる仕末である。さらには、使われている言葉の詳細な分析を通じて、善悪、神と悪魔の二元論に立って一つの意味を求める者の態度を単純主義者のとして、この作品は荒唐無稽なお噺であり、何をも最終的に啓示しない言語遊戯なのだとする主張まで現われる⁶⁴。このような状態から、「じっさいこの作品を読み、一貫した解釈をほどこすべく論文を書こうとして、結局途方に暮れることになった読者の数も決して少なくないはずである。」⁶⁵「詐欺師」たちの所作や言葉は当時のアメリカ社会に見られた現象のパロディであり、それによって彼の相手となった者の内面を照射する鏡の役割を考えると、特に奴隷制の面から見た場合の白人アメリカ人の醜悪さを暴くもののだとする Carolyn Karcher の論も⁶⁶、「コズモポリタン」登場後の部分にあまりふれていないことは、彼女の視点からでは全体の完結性、統一性が見出しえないことを示している。

2

このような状態を前にして、我々もひとつの読みを試みるわけであるが、確実なことの確認から出発したい。疑問の余地のないことは、1800年代のある年の4月1日、つまり万愚節の日、日の出から真夜中までに、河船「忠信号」上で起ったとされる乗客どうしの一連の出会いについて語られており、その出会いの有様が物語そのものを構成していることだ。時と場所が同じで筋らしきものがあることから、三一致の法則という古典演劇理論を連想するが、確かに、この作品の基本的構造に演劇と類似するところがある⁶⁷。

演劇の場合、登場人物の性格や筋の意味について観客に解説する者は普通は存在しない。この物語はすべてを知っている語り手によって語られるので、その点に共通性はない。だがこの語り手は極めて特異な語り手なのだ。この点に注目する研究者は、彼の言葉遣いの徹底した曖昧さ、どちらにも受け取れて一方向に意味を確定できないもどかしさを指摘するが⁶⁸、全体としての解釈を左右するような曖昧さは、細かな言葉遣いの次元から生ずるのではなく、この物語の語り手が採用した言わば演劇的提示方法とでも言うべき戦術にあると思われる。彼はすべてを承知しているので、語ろうと思えば登場人物たちの内面でも後日談でも語りうるのに、彼がはっきりと内面描写をするのは全篇を通じて「ピッチ」の反省を語る部分のみであり、4月1日以後のことを語るのは、床屋が「コズモポリタン」のことを友人たちに話したという数行にすぎない。特に「コンフィデンス・マン」たちの内面については一言の言及もない。舞台の俳優を見守る観客には普通外観と台詞が与えられるが、この語り手も登場人物の外観と彼らが発する言葉のみを主に提示するのである。

登場人物の外観と彼らが発する言葉のみを提示することは、カメラと録音機による提示の仕方であると言い換えることができる。カメラと録音器が与える映像は、対象となった人間の外面像でしかありえないために、その像を見る者が直ちにその人間の内面まで押し畳れるわけではない。人間が他者に対して開いていない部分、例えばその人間の記憶や感受性は、他者が容易に窺い知ることのできないものだからである。その上人間は自分の外面像を演出することができる。つまり、人間は嘘つきであったり、演技者であったりしうるゆえに、外面像を記号として受け取ると、それが何を意味する記号なのかを確定するには、かなりの手

続きが必要である。そして、その手続きが踏めない場合、記号としては意味不明の記号、何かを意味するかもしれないもの、として残ることになる。

このように考えると、この作品の語り手が演劇的、ないし映像的提示方法を採用したことから生ずる曖昧さは、提示される登場人物たちの外観と言葉を記号として受け取り、その意味を確定しようとする際の不確定性であると言えよう。このような外観を持ち、このような言葉を発する者の正体は何者か、いかなる内面の持主なのか、いかなる動機や目的があつてのこのような外観なり、このような言葉なのか、と同一^{アイデンティティ}したい者にとって、必要な判断の根拠が与えられないために思考が進展しないことである。

3

演劇的ないし映像的な提示方法を取るものがすべて曖昧なのではない。この物語のように、何を言おうとしたのか、終ってみてもわからない、というような演劇なり映画は稀である。それは殆どの場合、三一致の法則から言えば、「始めあり、中あり、終ある」ひとつの筋の展開があるからであるが、この点から考えると、この作品にはひとつの筋の展開するのに利用しやすい方法である一人の主人公の設定ということが、なされているのかいないのか曖昧である。この作品の題名、*The Confidence-Man: His Masquerade* から一人の「コンフィデンス・マン」の仮面劇であることを読者は予想する。もちろん、文法上の単数形は類概念を指すこともありうるので断定はできない。実際、物語に登場してはすぐ退場してしまい、同時に居合せることのない「コンフィデンス・マン」らしきものが八人もいるのだ。そして、語り手がそれら八人の関係について説明をしないので、一体それぞれ別人であるのか、一人の「コンフィデンス・マン」の変装であるのかははっきりしない。たとえ変装であると考えても、Foster が最初に登場する人物を正に逆の性格の人物と考え、「コンフィデンス・マン」たちの中に数えなかったような曖昧さが残る。それに「コンフィデンス・マン」たちが人間であるのかにさえ疑問があるのだ。

「コンフィデンス・マン」たちの一部に「蛇」のイメージが重ねられ、『失楽園』のサタンを想わせる言葉が使われ、「人間を大好物」とする「コズモポリタン」が、「人間の形をしているからとて、それから絶対的なことは何ひとつ結論できないね」(p. 193) と、聖書の例を引いて言うことなどから、「コンフィデンス・マン」の正体は超自然的存在、悪魔、なのであり、「コンフィデンス・マン」たちの姿を借りて彼が行う人間の吟味、試みこそが一貫した筋を構成するのだと主張する者が多い。一方、人間を吟味し試みる点は同じでも、それを行うのは悪魔ではなくて神であると考える者もいる。神であるとする主張にも、最初の登場人物がインカ帝国創建にまつわる天孫降臨伝説の Manco Capac に喩えられたり、コリント前書の愛に関する章句を引用したりする上に、他の「コンフィデンス・マン」たちがみな愛や信頼を説くという根拠がある。こういう解釈は、「コンフィデンス・マン」が複数であることと彼らの行動がひとつの方向性を持つこととを調和させようとするものである。

我々はこのような説の当否を論ずるのではなく、超自然的存在、ないし化身、というような概念の前提となることを考察することから、この作品の解釈に通ずる道を探りたい。作中の人物が現実の人間の存在様式から外れた姿を見せると、それをもって超自然的存在であるとされるわけであるが、このことは、作品外の、現実世界における超自然的存在の實在・不

在の問題と切り離して考えることができる。人間の想像力は想像する者の意志次第で、自然界には存在しない様々な性質の組合せを考えることができるからである。翼を持ち天空を馳せる馬であれ、数千年の眠りの後で再び立ち上がる人間であれ、思いのままである。こうして作中人物の「超自然的」性質は、作者の意志によって、正に作中で行われていることを可能にするために与えられたものであると承知しておけば、「コンフィデンス・マン」の正体を問わずに彼に接近することができる。彼はいったい何をするために呼び出された人物なのかと考えれば、事は極めて明白なのだ。「コンフィデンス・マン」たちが最初は不特定多数を、その後は個人を相手に、出会いを仕掛けていることに疑問の余地はない。そして、なぜ仕掛けが必要なのか、仕掛けの前提となる状態が物語の中に自明のこととして示されている。冒頭から語り手は“stranger”なる語を多用するが、後に登場人物の一人が“…… indeed, where in this strange universe is not one a stranger?” (p. 168) と言うごとく、この河船の乗客たちは互いにまったく見ず知らずの他人“stranger”であり、そうした他人の一時的集まりがこの物語の世界なのだ。この世界で人々が出会うとすれば、出会いを仕掛ける者が居なくてはならないし、様々な出会いが物語の展開に必要ななら、様々な仕掛人が必要となろう。しかし、仕掛けの意志を同時に様々な人間が抱くことには無理がある。ここで考え出された人物が仕掛けの意志と変装自在の能力を持った存在であると言えよう。そして変装能力は仕掛けを可能にするための手段にすぎないと考えれば、すべては出会いの持つ意味に収斂する。

4

この物語を寓話として読む者は、この河船に多種多様な人間が乗船していて、そのことを語る語り手の言葉遣いがあるような解釈へと誘うことから、「忠信号」^{フイデール}はひとつのミクロコスモスであり、乗客は人類の象徴であると決めこむ場合が多い。しかし、少し立ち止まって考えてみると、単に多種多様な個人が一時的に集まっていることは、コスモスという語が暗示する秩序の存在を何ら保証するものではないし、また各人の孤立した在り方を考えれば、単なる集まりが時空を越える人間性、ないし共通の精神的絆の存在を保証するものでもないことがわかる。この河船に秩序があるとすれば、それは「乗客」としての秩序、切符を持たない者は船長室へ呼ばれ、そこでキャビンの客か、暗く汚い「移民部屋」の客か、甲板の客かに分類されてできあがる秩序である。しかし、「忠信号」^{フイデール}の乗客たちは自分を「乗客」の一人と意識して、その点で他の乗客と連帯しうるなどと考えないのであるから、乗客たちをつないでいる秩序や絆があるとすれば、「乗客」ということ以外に探さなくてはならない。それでも、「地球号」の乗組員である人類のモデルなのだと一挙に解釈の次元を普遍化することは、貨幣によって秩序だてられた歴史的状況を、人間一般の超歴史的、運命的状況であるかのごとく提出する語り手の世界認識を無反省に受け入れることになる。貨幣によって分類され孤島化した個人の一時的集まりが、そのままひとつの象徴となりうるような社会を歴史的に確定する必要がある。膨大な数の移民、都市の急成長、地理的・社会的流動、産業主義の拡大といったごとを特徴とした19世紀中葉のアメリカ、即ち、メルヴィルにとっての現代社会こそがそのような社会であったと思われる。このように考えると、この作品が人間がみな見ず知らずの他人となり孤島化した状態の中での出会いに焦点を置くことは、作者の側

に、自分の周囲の人々はいかなる点で連帯しうるのかを見極めてみたい願望があったと言えるだろう。

偶然の出会いにおいては、人は互いに相手の過去や内面についてまったく知らないゆえに、今現在の自分の目に映る相手の外観と耳を通して入る言葉によって他者と向かいあう。このようにして獲得される他者認識が不完全なものでしかありえないことは先きに考察した通りである。「コンフィデンス・マン」たちに出会いを仕掛けられた人々は、相手の内面や正体について思いめぐらすのが、はっきり断定することはできない。さらには、その同定の過程で、彼ら自身の主観的偏りや性向をむきだしにする。こうして、我々が作品と読者の関係から考えてきた問題は、実は作品の内部における登場人物たちの、特に「コンフィデンス・マン」を相手にした人々の、問題でもあったわけである。それでは「コンフィデンス・マン」たちの仕掛けによって、何が具体的に明確となったのか。

5

最初の登場人物、「クリーム色の衣服を着た男」は、人々の前に立って、無言で聖書の文句を書きつらねる。「愛は人の悪を念はず」、「愛は寛容にして慈悲あり」、「愛はおほよそ事耐ふるなり」、「愛はおほよそ事信ず」、「愛は長久までも絶ゆることなし」。人々は、「奇妙なほど純真な」彼の外観を時と場所に不釣合なものと思い、「彼の書くことも大部分同じような類いのものだとする考えに傾いた。つまり、どこかの珍しい白痴と思った」(p.2)と語り手は語る。こういう語り方は人々の内面描写と言うより、語り手が代って行う総括的判断と呼ぶべきものであるが、ここで明らかにされていることは、純真そうに見える人物が聖句を引用して愛を説こうとも、人々はまったく相手にしないのだということである。そのことは、彼がやがて押し退けられ、赤帽たちに荷をぶつけられて船から落ちそうになることで具体的に示される。

「クリーム色の衣服を着た男」が消えた場所に、黒人で鬻りの乞食が登場する。「黒人」であり、「鬻り」であるという外観に対して人々はどうのように反応するのか。自由黒人であると言う彼を奴隷(chattel slaveryのchattel=cattle)化したい気持ちかられる博労であれ、彼を犬に見たてて小銭を投げる人々であれ、彼を人間と見ていないことは明らかである。まして小銭まがいの金属を投げて興ずる者は彼をまったく犬として扱っている。「義足の男」が登場して、「ブラック・ギニー」が黒人でも鬻りでもなく、白人がお金のために演技しているのだと言いたると、人々の態度は一変し、「ブラック・ギニー」が本物である証拠、ないし証人を出せと迫る。そこで「ブラッキ・ギニー」が証人として姿形を列挙した“ge'mmen”たちが本人の退場後に次々と登場する仕組になっているわけであるが、もともと黒人を人間と見る目を持たず、気前よくもなかった人々は、黒人の姿で鬻って歩く眼前の哀れな姿よりも、白人が仮面を使って他者を欺き、金銭を詐取する可能性に敏感であることをあらわしたと言えよう。

「コンフィデンス・マン」の第三回目の仕掛けから、相手が特定の人物となる。「喪章を付けた男」の相手に選ばれる者が、「ブラック・ギニー」に対して同情的に振舞った唯一の人物であることは当然であろう。「喪章を付けた男」の無心に、彼は、「はっとして、見たところ引き下がろうとするかに見えた」のであるが、「まったく人間味を欠くわけでもないの

で」(p.17)、相互扶助を命ずる同じフリー・メイソンの一員であることを確認されると、仕方なく相手の話を聴くことになり、その結果は、「ブラック・ギニー」に与えた以上の金額を握らせることになる。「ブラック・ギニー」、「喪章を付けた男」、さらには「黒い急流石炭会社」社長と、見方によっては同一の人物に三度も騙まされるこの運送業者ロバーツは、三回もの仕掛けにどんな内面を露わしたと言えるだろうか。「黒い急流」の社長が主張するように、「ギニー」は自分を不幸な人間と見ていず、そのように見るのはロバーツの主観的な幻想かもしれない。また「喪章を付けた男」の身の上話は、誇張や歪曲に満ち公平さを欠いたものかもしれない。その上、ロバーツが見た移民部屋の病人、「今にも離れてゆきそうな」命と財布を抱きしめている病人にも、第三者から見れば「償いとなるような考え」がないわけでもないかもしれない。つまり、この世には客観的に見て悪や不幸が存在すると主張してはならないのかもしれない。しかし、こういう意見にロバーツが一応同意しながらも、酒の効き目か、自分も予期せずに、「ああ、酒はよし、信頼もよし。だが……(中略) 真実は慰めようのないものだ」(pp.49~57)と云ってしまうことは、一旦確立した世界観が簡単に否定されないことを示している。ロバーツは「まったく人間味を欠くわけでもない」ので、眼前に避けようなく他人の悲惨を押しつけられれば、仕方なく同情するのであるが、一方、チャンスと見れば、普通ではない取引きにも敢えて踏みきる「真実」主義者なのだ。

登場の順序から言えば、「喪章を付けた男」の次に「灰色の上着と白ネクタイの男」が来る。彼はセミノール・インディアン戦争の犠牲となった寡婦と孤児のためにと寄付を求めて歩く。それを憤然と拒否する人々は「連帯」と無縁であるので簡単に扱われる。この種の要請に答えるだけの「人間味」を備えた人間だけが物語の展開に必要なのだ。黒人奴隷を連れ、この世の汚い仕事はすべて奴隷にやらせる「純白な手」の持主はどうか。彼は熱心なこの慈善家へ「半ばユーモア、半ば憐み」からかなりの額を与える。しかし、博愛精神による社会改革など、「人間が相手では見込みがないね」(p.34)と、既成の人間観から一步も出ようとしない以上、「コンフィデンス・マン」の熱弁も、醜悪な現状を容認する以外にないのだとする、この南部紳士の自分に都合のいい世界観を確認したに止ると言えよう。

ロバーツと「大学生」は、金儲けのチャンスとばかり、自分の食欲から「黒い急流石炭会社」社長へ接近したが、この慈善事業家に自分の方から接近したい様子を見せ、最後に20ドルを手渡すことになった女性の場合はどうか。彼女は「見たところ、喪の殻から今しがた出かかった寡婦らしい」と語られるが、偶然隣り合わせた男の表情に「心をひかれ」、わざと落した聖書を相手拾いあげると、「婦人の目は輝く。明らかに今やまったく好かない奴と知っているのではない」(p.37)と語られるところを見れば、彼女はもう husband-hunting を開始している、と暗示しているのだ。

「黒い急流石炭会社」社長は、肺病の咳に苦しむ「病人」の金銭欲に訴えて投資のための言わば「信頼金」を獲得する。そしてこの直後には、「薬草医」へと読者の面前で変身し、健康を回復したい「病人」の願望に訴え、「自然の薬」を売りこむ。自分の薬が万能であることを説く彼に、苦痛のために体を折りまげているらしい大男が、「恐れ気もなく人の心をいじくる奴、蛇め！」(p.75)と一喝するが、それに対して「薬草医」が「人間味をなくした男よ」とやり返すことは覚えておく必要がある。それは次に、彼が貧乏ゆえに不当な扱いをされ両脚の自由を失ったという男に「鎮痛剤」を無料で与え、「人間味」を体現してみせるばかりでなく、「ミズーリ男」ピッチを相手に「人間味」を論ずるからである。ピッチの

態度は、「自分ひとりで立ってられなけりゃ、さっさと墓に入りな、爺さん。寄りかかりたい者には無情な世の中なんだ」(p. 96)という言葉に要約できよう。この地点までのピッチは、経験ないし現実と矛盾する願望は諦める以外にないのだと考えている。こうして、「薬草医」の仕掛けによって確認された人間の内面を要約すれば、健康を回復したい病人の願望であり、不運な人が稀れな親切を前にして示す感謝であり、願望と現実の矛盾を強く意識する者の禁欲的姿勢であると言えよう。

「薬草医」の次に周旋業者としての「コンフィデンス・マン」が登場し巧みな議論によってピッチを信用させ、斡旋料を獲得する。この仕掛けが意味していることは、願望思考を拒否して現実のみを認めようとする姿勢も、その現実について人間が相対的な認識しか持ちえないことを認めるとき、自分の願望を完全に断念するまでにはかなりの揺れを経験するということである。ピッチは三十人に及ぶ様々な少年たちを雇った経験に照らし、ひとつの結論に達していた。それにもかかわらず、「若くて、丈夫で、勤勉な」少年が発見しようと主張されると、その可能性に賭けてしまう。つまり、彼の態度は、経験に基く知が絶対的真実であることを主張できないために揺れるのだ。ひとり後に残されて、彼が以前の間隙にこり固まろうと決意するとき、最後の「コンフィデンス・マン」である「コズモポリタン」の登場となる。

この人物の登場を以って、作品は別の次元へと進む。これまでの「コンフィデンス・マン」たちが、「不具」、「不幸」、「株」、「慈善事業」、「薬」、「周旋」といった「連帯」を仕掛けるための具体的手段を持っていたのに対して、「コズモポリタン」の道具は、「人類の善意」、我々の言葉を使えば「連帯」という思想だけしか持たないからである。そして彼の仕事は、主に相手に語らすことによって連帯拒否にこり固った人々の動機と論理を明らかにすることである。

チャールズ・アーノルド・ノーブルと名乗る職業不明の男は、「コズモポリタン」に自分の方から接近するが、その動機は必ずしも明確ではない。それでも、彼が語る「インディアンを憎む形而上学」とモアドック大佐の話が、絶対に心を許すなという他者への警戒と憎悪を志向するものであるにもかかわらず、自分は連帯をよしとするかに振舞い、ならば自分は手をつけたくない酒と煙草を積極的に相手に勧める矛盾を見せることで、彼の動機に善意以外のものが働いていることを示している。高笑いする者に悪人はいない、との相手の言葉に、間髪を入れず高笑いする態度はぎこちないものだ。金銭の貸借を禁ずるポロニアスを気高さに欠けると軽蔑し、「コズモポリタン」の借金申込みに裏をかかれるところなどは、連帯の外観を装い、内心で何を狙っているのかわからない人間を代表すると言えよう。

ノーブルが語る「インディアンを憎む形而上学」とモアドック大佐の生き方は、Shroeder, Shroeder 説に反対する Roy Harvey Pearce⁶⁹, Shroeder 説を批判的に継承する Hershel Parker⁷⁰, その他多くの論者がメルヴィル自身の立場を表明するものであり、この作品の核的部分であると見なしてきたが、近年の W. M. Ramsey 論文は⁷¹, ノーブルの話がどこまで伝聞でどこまでが体験に基くのか、信憑性に関して幾重にも重なる疑問があることを指摘し、簡単に本心を捕えさせない作者の手法に注意を促している。

信憑性の問題を除外すれば、「インディアンを憎む形而上学」という題目が示す通り、この話は、個人としてのインディアンへの憎しみではなく、ひとつの人種全体への憎悪がいかんにして形成されるのかその過程を説明したものである。奥地人の子供は、歩まねばならない

「孤独で遠い道が、インディアンの土地を通る」ことから、用心のために、インディアンがいかにか悪党どもであるかの話ばかりを聞かされる。それらの話がインディアンの実態からどれほどかけ離れたものであると、その子供の安全に役立つ限りどうでもよいのだ。「要約しますと、奥地人の言葉が信用できるものとすれば、インディアンに対する悪感情は、正しく見ると、自分自身の根拠に基くというよりも、他人の話に、或いは、両方の組合せに基くものなのです。」(p.129) ここには、ひとつの人種観が自己保身の動機からなされる幻想教育の結果なのだとする重大なことが語られている。

勿論、ノーブルが伝える話は、人間観形成において体験が果たす意義をまったく否定しているわけではない。モアドック少年は、「インディアンの中でも例外的な成らず者たち」(p.133)によって、家族を皆殺しにされる。彼は復讐を誓い、歳月をかけて遂に全員を倒す。「しかし、それで十分ではなかった。彼は口に出して言いはしなかったが、インディアンを殺すことが彼の執念となっていた」(p.133)。そして、インディアンと見ればすべてを殺す者となった。ここには、部分的、相対的な経験から全体の解釈を決めてかかることにも似た飛躍がある。モアドックが犯人たち全員を殺しても満足せず、インディアンという種族全体を抹殺したいと思うのは、部分的であるべき「犯人像」が種族全体に固定したからだと考えられるからである。

「コズモポリタン」の次の出会いは、全体に関してひとつの信念なり解釈なりが一旦形成されてしまうと、それを合理化するどんな論理でも構築可能であることを示すものだ。マーク・ウィンサムMark Winsamの哲学は、エマソン哲学の諷刺であると言われることが多いが、何よりも、この哲学が「世の経験と同じ人格をつくる」と主張されていることに注目しなければならない。「それこそがこの哲学が真理であることの証拠である。というわけは、この世のやり方と矛盾した働きをする哲学は、この世に合わない人格を生み出しがちであり、そのような哲学は必然的に騙りであり、夢に他ならないからである」(p.170)。もしウィンサムの言うことが正しいとすれば、彼の哲学を検討することは、個々の体験を反省して得られる知恵、換言すれば経験に基く理論の一切、を総括する意味を持つだろう。

ウィンサムに代って、弟子のエグバートEgbertが実生活において師の哲学がいかにか働くかを説明する。この哲学は、相手にどのような事情があるにせよ、一切の同情なり援助なりを拒否するものだ。友人とは、そもそも、その友人の両親が高い地位なり「評判の財産」を持つゆえに選択されるものであり、その友人が無一文になって借金を申込むとすれば、「まったくこの男には詐欺的に騙された」(p.176)と言って追ひ払うべきものなのだ。他人に借し与えないだけではない。エグバートが語るチャイナ・アスターChina Asterの喩え話は、どんな喜ばしい夢や見込があろうとも、それにひかれて他人から借金をすることは絶対に拒否すべきことを説くものだ。ウィンサムの哲学はこうして自己防衛を最大の動機としていることがわかる。

エグバートが自説の合理化に用いる論理は面白いものである。人間とは、「運命の波風に弄ばれる」者であり、同情が必要であると訴える相手に、「とんでもないよ、フランク。人間はそんな君の言うような哀れな者じゃない。……(中略)……人間には魂というものがあるんだ。それは意志次第で運命の支配や未来の悪意など超越させるものだ」(p.176)と言ったかと思うと、「最善の人間も、最悪の人間と同じ様に、人間としてのあらゆる偶然から逃れられない」のであり、人柄が変りうるのだと主張する。人間とは日々に変化するものであり、「変ることのない本性や意志の力で持ち続けられるどんな気持や考えもありはしない」。そ

れゆえ、かつての友が敵ともなりうる、だからそうならないように援助はできない、と結論するのである。「首尾一貫性とは小人物が恐れる幽霊である」とはエマソンの有名な言葉であるが、エグバートも、「首尾一貫性？ そんなもの！」(p.191)と一蹴する。合理化のための論理などどうでもよいのだ。経験の教えと合致することが自慢のこの哲学は、同情や連帯ということ徹底して拒否する冷さを持つ。メルヴィルは、エマソンの心情面に欠陥がある、と記したのであったが、そのようなエマソン理解がここに表現されていると言えよう。

「コズモポリタン」は次に人間不信にこり固まった床屋に顔を剃らせ、その代金を踏みたおす。床屋が語る不信の理由は、またしても部分的な経験から人間全体への不信へと直結する。彼は既に第一章に登場して、「クリーム色の衣服の男」が掲げる愛の聖句と対照的な「No Trust」の看板を掲げていた。この看板は、愛の聖句とは違い、「嘲笑、ないし驚き、まして怒りなど」ひき起さず、「どう見ても、白痴の評判を……(中略)……もたらしたとは思われなかった」(p.3)、つまり世の常識にかなった態度と受けとられた、と語られていたことを思い出すなら、彼の動機もまた世の常識に一致すると考えてよいだろう。「床屋、君から教えてもらいたいことは、単に人の頭の外側を扱うだけで、どうして心の内側を信用しないことになるのかということだ」と「コズモポリタン」が尋ねる。床屋の答えは次の様なものである。

「いやあ、お客さん、ひとつだけ挙げるとすれば、いつもいつもマカサル油や毛染め薬、美肌剤、つけひげ、かつら、はげ隠しを扱っていて、それでも人間は見かけ通りだなんて信じられますかな。思索型の床屋の頭に何が浮かぶと思われませんか、用心深いカーテンの蔭で、薄くなって枯れた切り株みたいな毛を剃って、世間へ出すときは、カールした栗毛にくるまり輝くような頭ですよ。カーテンの蔭の恥かしげな様子、誰か知った人にのぞかれて見つかるのではとビクビクしていたのが、通りに出るときは、同じ人間が堂々と、世に敵なしといったプライドで。愉快的詐欺ですな。すると、どこかの正直者がもじゃもじゃ頭で道をあけるといふもんですわ。まあ、お客さん、真実が持つ勇氣などと口では言いますが、私の商売から見ますと、真実というものは、時に気の小さいものですな。嘘、嘘、勇氣のある嘘にはかないませんよ」(p.199)。

こうして、人間の外観は、悲惨醜悪な実態を隠して美しい幻影を他に押しつけるための仮面であるとする認識と、美しい言葉こそ用心すべき動機を秘めるという警戒の哲学を披瀝した後で、床屋はそのような見せ掛け行為に加担する理由を語る。「お客さん、私も暮していかなくちゃなりませんから」(p.199)という諦めである。

この作品の最後の章、「コズモポリタン真剣さを増す」については、この章に描かれている場面の象徴的意味を窮めようとする試みがある。ダニエル・ホフマンの分析はその一例である。しかし、「コズモポリタン」がなぜ「真剣さを増す」のかについて、次のように考えることもできるのではないだろうか。「コズモポリタン」はこれまで経験との関連から連帯拒否や人間不信を標榜する人々を相手にした。さらに連帯の可能性を探ろうとすれば、経験ないし現実とは無関係なところから発想する精神でなくてはならない。そして、そのような精神は、人間は他の人間と既に結ばれているのだと連帯の存在を前提として行動する精神

か、連帯を命令する者に従う精神かのいずれかとなるであろう。前者はドン・キホーテの聖人となろうが、経験の支配する領域では惨々なめにあうこととなる。この作品の語り手には、そういう無垢で目覚めることのない「美德の道化」について語ることはできないようだ。その代りに「コズモポリタン」が最後に検証する精神は、七十年の生涯を通じて常に聖書を読み続けてきたという老人の精神である。この老人の目が、たとえ眼前に立っている相手が見ず知らずの他人であれ、ひたすら隣人愛を命ずる者に向けられていれば、「コンフィデンス・マン」たちの企てはすべて無用のことであつたとさえ言えるだろう。なぜなら、出会いを仕掛けて連帯の可能性を探ることは、その不可能の予感に発しているが、連帯の命令に忠実に従う者がいることは、そもそもから出会いの相手を間違えていただけのこととなろうからである。この点に「コズモポリタン」が「真剣さを増す」理由がある。しかし、この老人が気軽にすり対策の腹帯や偽金発見機を買い込んでしまうところに、「コズモポリタン」の全仕事が完了すると言える。この老人も金銭によって守られてきただけなのだ。真理の光によって歩んできたという自己認識は、実は無反省に基く単純さであった。このことを今暴露されると、彼は自分一人では自分の部屋へ戻ることもできない単なる老人にすぎなくなる。そして、突然出現した精神的暗黒、このどんな安心も消えうせた世界に戸惑いつつ、個人を守る神の摂理を口にする。神は彼に安心感を与える手段のひとつにすぎないわけである。「人間の善意」を代表する「コズモポリタン」は、最後まで同情を忘れない。救命具を探す老人に、ブリキの便器を与えて安心させる。

6

以上のように「コンフィデンス・マン」たちが仕掛ける出会いをたどってみると、ここから「見ず知らずの他人」から成る世界における人間関係について、ひとつの結論めいたことを引き出すことができる。この世界には、人間と人間をつなぐものが、相手を手段として使う利用関係以外に存在しないということである。各人が抱く願望が金儲け、健康回復、よい使用人の獲得等々いかなるものであれ、相手がその願望実現の手段となりうる時以外に、他者に関心を示すことは滅多にないのだ。逆に、悲惨、不幸等の状態に置かれ同情を求める他者が現われると、即ち、手段としての他者ではなく自分がその者にとって何らかの手段となりうる者が現われると、警戒心が働き、自己保身の動機から同情拒否となる。人間はすべて仮面役者であるとする見方は、自分を手段化するための仮面なのだ、と考えるときから警戒心と結びつく。こういう状況から生まれるひとつの哲学が、手段としての他者性を完全に排除した関係のみを認める理想主義である。さらに、このような人間関係は、安心できる生活基盤を持たない孤立した人間たちの不安と、貨幣のみが頼りなのだとする認識から発していると考えることができる。

一方、アメリカ人のこうした索漠とした精神を暴露する「コンフィデンス・マン」たちについて、この一連の仕掛けは何を暴露しているのか。先きに我々は、文学における超自然的なものとは現実を正確に模写する意志に基くのではなく、願望によって呼び出されるものであることを論じたが、愛や希望や信頼を説く点でキリスト教を代表させても、人間を試してその内面を暴き出す意図を、メルヴィルが善意と結びつけることができなかつたところに、悪魔のイメージをふりまく理由の一部があるだろう。

更に重大なことがある。それは、出会いを仕掛けるに当って「コンフィデンス・マン」たちが用いた仮面的手段、即ち彼の外観と言葉があくまでも手段でしかなく、その時その場の目的には合理的であっても、ある一点で詐欺師的であることが否定できないことである。例えば「黒い急流石炭会社」社長は、「ブラッグ・ギニー」や「肺病患者」の悲惨や「喪章を付けた男」が訴える不幸の实在を否定しようとする。だがそれは語り手がやがて Tombs で の不当な扱いのため両脚の自由を失った男を登場させて示すように、否定しえない現実を言葉の上で否定しようとする態度である。また「薬草医」は薬に客観的効果がなくとも慰めさえ与えられるならそれを与えることが親切だと考えている。こうして、自分の言葉が物の世界との厳密な照応に基く論理であること、つまり客観的に真実であることに潔癖であるよりも、喜びを与えることを第一義とする論理、つまり相手の願望に合わせて論理を組立て相手の精神を秤りにかけつつ連帯を企てる点で、「コンフィデンス・マン」の成功は嘘に基くと云えるだろう。彼は相手を試す意志と言葉を操る狡知とを持つが、自分を賭ける究極の価値を持たない点で、内面に大きな虚無を抱えている。

連帯拒否に徹する「人間味」を失った人々も、逆に、連帯実現を図るためどんな幻想的論理でも利用する暖かそうな人も、共に困るのだ。このように考えると、この作品は二つの否定の出会いによって何らの肯定も生じなかった物語なのだと定義できよう。

この作品を書くことによって、メルヴィルは1850年代のアメリカ社会の本質的性格と喜びを約束するあらゆる論理の信頼不可能性を確認した。同時代のアメリカ人の孤立状態、そこから生ずる冷やかな個人主義に絶望し、それらを克服するかに見える言葉が詐欺的幻想でしかないと考えたところに、メルヴィルの「健康」問題があったと思われる。聖地旅行に出た彼を待っていたものは、また深い失望であった。

Notes

- (1) Merton M. Sealts, Jr., "The Chronology of Melville's Short Fiction, 1853-1856," *Harvard Library Bulletin* 28, p. 403.
- (2) Elizabeth Foster, Introduction to *The Confidence-Man: His Masquerade* (New York: Hendricks House, Inc., 1954), p. xxiii.
- (3) Jay Leyda, *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville, 1810-1891* (New York, 1969), p. 517.
- (4) R. W. B. Lewis, *Trials of the Word: Essays in American Literature and the Humanistic Tradition* (New Haven and London, 1965), p. 61. Jay Leyda, *Ibid.*, p. 563.
- (5) Thomas C. Cochran and William Miller, *The Age of Enterprise: A Social History of Industrial America* (New York, 1961), pp. 81-86.
- (6) Herman Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade: An Authoritative Text: Backgrounds and Sources: Reviews Criticism: An Annotated Bibliography* (New York: London, 1971), pp. 269-278. 以下引用はこの版からである。
- (7) F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (London: Toronto: New York, 1941), p. 411.
- (8) Richard Chase, *Herman Melville: A Critical Study* (New York, 1949), pp. 185-209.
- (9) John Shroeder, "Sources and Symbols for Melville's *Confidence-Man*," *PMLA* LXVI

- (June, 1951), pp. 363-380.
- (10) Daniel Hoffman, *Form and Fable in American Fiction* (New York: The Norton Library, 1973), pp. 279-313.
- (11) Tom Quirk, *Melville's Confidence-Man: From Knave to Knight* (Columbia: London, 1982), p. 59.
- (12) Matthiessen, op. cit., p. 412 and p. 492.
- (13) Bruce Franklin, *The Wake of the Gods: Melville's Mythology* (Stanford, 1963), pp. 166-168.
- (14) William Bysshe Stein, "Melville's *The Confidence-Man*: Quicksands of the Word," *American Transcendental Quarterly* 24 (1974), pp. 38-50.
- (15) 杉浦銀策, 『メルヴィル: 破滅への航海者』(冬樹社, 1981), p. 148
- (16) Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America* (Baton Rouge: London, 1980), pp. 187-257.
- (17) Walter Dubler, "Theme and Structure in Melville's *The Confidence-Man*," *American Literature* 33 (1961), pp. 307-319.
- (18) Lewis, op. cit., p. 65. Hoffman, op. cit., p. 281. John G. Blair, "Puns and Equivocation in Melville's *Confidence-Man*," *American Transcendental Quarterly* 22 (1974), pp. 91-95. William M. Ramsey, "The Moot Points of Melville's Indian Hating," *American Literature*, Vol. 52, No. 2 (May, 1980), p. 226.
- (19) Roy Harvey Pearce, "Melville's Indian Hating: A Note on a Meaning of *The Confidence Man*," *PMLA* 67 (1952), pp. 942-948.
- (20) Hershel Parker, "The Metaphysics of Indian-hating," *Nineteenth-Century Fiction* 18 (1963), pp. 165-173.
- (21) Ramsey, op. cit., pp. 227-233.
- (22) Leyda, op. cit., p. 649.